
THE WRITER OF THE WORLD

ボブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE WRITER OF THE WORLD

【Nコード】

N4850M

【作者名】

ボブ

【あらすじ】

藍染惣右介率いるアランカルとの決戦は死神側の勝利に終わる。だが、それは始まりでも終わりでもなかった。
一護達の新たな戦いが今始まる。

序章（前書き）

初投稿です。至らぬ点があると思いますが、生温かい目でみてもらえるとありがたいです。

序章

雨が降っている。

そこは本当に何も無い平原であつた。

しかし、人ならずものの目でみればそこはただの平原ではなく、悲惨な戦場跡であつた。

地面一面に広がる、屍の山と大量の血痕は、その場の空気を否応なく重くしていた。

そしてそんな悲惨な戦場に数人の男女が立っていた。彼らは霊子へと帰っていく黒い着物と刀をもつたそれらを一言も発さずただ見ていた。

その内一人また一人とその戦場から去っていく。

最後に残つたのは一人の青年と、手と服と黒い髪を血で真っ赤に染めた一人の子供であつた。

「わたしは今日の、そして今までの記憶をこの雨とともに忘れる。」
そのこどもは誰にいうともなしにつぶやく。

青年はだまつてそれを聞いていた。

「だけど、けつして失くさない。絶対に思い出す。それがわたしにとつても貴様にとつてもいいかどうかはともかく。・・・だから」

そしてそのこどもは青年の目をしっかりと見据え宣言する。

「だから、それまではさよならだ。・・・とうさん。」

その言葉を言つた直後、青年がそのこどもの前に手をかざすとそのこどもはグラリと身を倒す。気を失つたそのこどもを支えながら、青年はそのこどもの身に何かを埋め込み、ポツリと呟く。

「ええ、またあいましょう。そしてそれまでは、願わくばよい夢を・・・ルキア」

それは過ぎ去った過去の記憶。誰にも忘れられてしまった。知られてはいけない記憶の残滓。しかし雨とともに流れたその記憶はけっして消えずに漂い続ける。・・・雨は未だに降り続けているのだから。

1話 戦の後日談（前書き）

捏造設定、また今後の話からオリキャラ多数出てきます。注意してください。

1話 戦の後日談

井上織姫の拉致から始まる藍染惣右介率いる破面との決戦は端的に言えば死神側の勝利に終わる。主犯の藍染惣右介が文字通りちりも残さず消滅し、その他のエスパーダ等の幹部達も大半が死亡。残ったものたちも逃走したのだから。

とはいえ、問題が全て片付いた訳ではもちろん無い。

逃亡したアランカルの対策以外にも、裏切った死神の内死亡が確認された、藍染惣右介・東仙要以外の最後の一人。本物の空座町を舞台にした最終決戦のさなかに行方をくらませた、市丸ギンについても考慮しなくてはならない。

そうでなくても、隊長格の大半が負傷し、ソウル・ソサエティにはろくな戦力が残っていないかった。さらにプラスして、通常業務や大量の事務処理。そして個々の精神的なキズ、問題といった二次的な問題はじょじょに死神達を疲弊させていった。

戦争は終わった。しかし問題はやまずみである。

そしてそれは、この戦争の中心となった、オレンジの髪の死神代行にも、そして最終決戦において最終的に藍染惣右介に手を下した黒髪の死神にとっても同じであった。

護る力が欲しかった。他の何に比べても。

「オウラア！起きろ一護。モーニンどころかイブニングだ。コノヤロ！」

人形に話かける。それは、ある意味ではほほえましい光景である。ただそれはTPOがあっている場合に限っており、この場で繰り広げられるライオン人形とオレンジの髪の一見するとヤンキーにしか

見えない男との舌戦は傍目からみたら不気味を通り越していつそシ
ュールである。

オレンジ髪の男の名は黒崎一護。死神代行である。

「うつせーなコン。たまの土日くらい休ませろよ。疲れてるんだよ、俺は。一日中なーんもしなくていいおまえとちがつてな。」

その言葉に対して、コンとよばれたライオン人形はピョンつと一護が寝転がっているベッドの上に飛び降り、その落下スピードそのままに一護の頭にけりをくらわす。

「おふっ」

「なんだとー。てめえ、おれがてめえの妹のせいでどれだけスリリングな日常送ってると思って・・・じゃねえ。それはどうでもいいやよくないけど。てめえさっきていうか帰ってきてから鬱オーラ全開でうつとーしーんだよ。」

秋なのにこの部屋だけじめてんだよ。となおもコンは抗議する。

「うつせーな。俺にもいろいろあるんだよ。いろいろ。」

「いろいろってなんだ。ネエさんもいねえし、こちとらストレスたまりまくりなんだよ！」

「知るか。ルキアはソウルソサエティに帰ったんだよ。」

そういつて一護はコンをむんずとつかむとそのまま壁に投げ捨てる。

バスツという効果音とともに壁にもろにぶつけたコンはそれでもめげずにグルミ権侵害で訴えるぞコノヤロー。となおも騒いでる。

「もうお兄ちゃんうるさい。何一人でまた騒いでるの？」

ガチャっというドアの音とともに一護の妹の遊子が部屋に入ってくる。と・同時に先ほどまであれほど騒いでいたコンは一気にフリーズする。

「あれっ。ボスタッフ（＝コンのこと）またおにいちちゃんの部屋にいる。」

「あーなんかまぎれこんでた。ちょうどいいから連れてかえってくれ。」

ふーん。と首をかしげながら、遊子はコンをつかむ。一護はコンの声にならない悲鳴を聞いた気がしたが、スルーする。

遊子とコンがいなくなつて静かになつた部屋で、一護はベッドに再び寝転がる。

わかつている。と一護は思った。自分があの藍染との決戦以来沈んでいることも。そしてあれほどまでにコンが騒いでるのは、そうやって沈んでいる自分を今この場にいない相棒の代わりになんとかしようとしてのことなのも。全部わかつている。

「でも、どうしようもねえじゃねえか。」

一護はだれにいうでもなく呟く。

現在一護を悩ませている問題の大半は自分でどうしようもないことであつた。それは父親が死神であつたということであつたり、実は自分は観察という名目でずっと監視されていたということであつたり、出会いと戦いがその観察者（＝藍染惣右介）の作為によるものであるならば、自分のいままでの人生はなんだつたのか・というかなりアイデンティティが崩される事実であつたり。そして・・・自分は結局護れなかつたというどうしようもなくつきつけられた現実だつた。

最終決戦、自分はできるかぎりのことはした。その事には間違いない。だが、藍染はそうした自分の努力も、手に入れた力も全て計算の内にいれており、結局自分ができたのは藍染惣右介から崩玉を引き剥がすアシストをしたことだけであつた。

崩玉を実際引き剥がしたのは、浦原さんで、

崩玉を元の姿に戻したのは、井上で、

その元の姿というのはルキアの一霊力　ちから　で、

藍染を倒したのは、それによって霊圧が飛躍的に向上したルキアだつた。

空座町は護られた。自分の友人たちも、家族も、戦友たちも。だが、それを行ったのが自分ではないということが、悔しくて、そう思う自分が惨めであった。

ソウルソサエティ 瀨霊廷 朽木家にて

はあー。と朽木家の縁側で朽木ルキアは盛大に溜息を吐く。

空は晴天。体調も万全。しかし気分は全く晴れない。

「なにやってんだルキア。休んでろよ。」

ふすまをスパツと開けて、赤髪で大柄な死神が部屋に入ってきて、ズンズンとルキアに向かって歩いてくる。

「たわけ、怪我などとうの昔に癒えた。それより恋次、貴様こんなところで何をしている。まだ勤務中のはずだろう。」いぶかしりながらルキアは話かけてきた死神・阿散井恋次に目をやる。「まさか貴様・・・さぼりか。」

「ちげえよ、馬鹿。・・・つか隊長の家でさぼりってどんだけだよ。任務だ任務。テメーの監視が俺の仕事。」

それを聞いてルキアは思わず頭をかかえる。「今度は貴様か。」

ソウルソサエティに戻ってきて数週間、本来なら通常の隊務に戻っているはずだが、ルキアは朽木家にて監視つきの謹慎を命じられていた。

命令はわかる。藍染惣右介との決戦で崩玉が元々自分の霊力であるということがわかった。だがいくら自分の霊力とはいえ、急激に上昇した霊力には通常霊体は耐え切れない。人手が圧倒的に足りない今、暴発する危険性のある人間にうろつろされるのは困るということなのだろう。しかし謹慎は分かるが、なぜ監視つきなのか？しかもその監視は、技術開発局の変人どもや、刑軍の連中によって日毎に入れ替わり立ち替わりで行われ、自分がモルモットか犯罪者になってもなった気分である。

しかも、やっとその監視が消えたかと思ったら、次の監視は本当なら激務に追われる兄の副官である恋次だ。ただでさえ考え事が多いのに、自分のせいで兄の仕事の負担が増えると思うと頭も抱えたくなるというものだ。

頭を抱えて深く溜息をつく幼馴染をみて、恋次はまた、くだんねえことで悩んでんな。と苦笑する。

技術開発局や刑軍によるルキアの監視は靈力の暴走を危惧してというよりルキアが存在そのものを危惧しているというウェイトの方が高い。誰も倒すことができなかった藍染惣右介を圧倒的な力で倒した存在。それは反逆者を倒した英雄というよりもなにか、えたいの知れない存在であった。実際、決戦後ルキアを初めてみたとき恋次は無事だった。という安堵感よりもルキアから発する壮絶な靈圧に対する恐怖感の方が先に立った。

だけどいくら靈圧があがろうと、コイツはかわんねえ。そのことに若干安堵しながら、恋次は口を開く。

「いつとくけどな、俺にお前の監視を命じたのは隊長だからな。」

「兄様が？」

ルキアの顔にははつきりと一体なぜと書いてある。

それをみて恋次はあの鉄面皮の隊長の顔を思い出しながら話す。

「いつまでもよそ者、しかも十二番隊や二番隊の連中に邸内をうろろされるのは不愉快だつてさ。なんだっけ、ほらあの現世でいう・

・そうプライバシーの侵害だ。つってさ。それなら監視は自分の隊からだすつて言つて。俺がここに来たつーことだ。」

「なるほど。まさかそれほどまで兄様が不愉快に感じられていたとは・・・本当に申し訳ない。」

そういつてシユンとなるルキアを横目に見ながら、まあそれは表向きの理由だがな。と心の中で呟く。

そもそも朽木家は普段からその家柄故使用人含め多数の人間が行き来している。よそ者つんぬんの話にしたって、朽木家が女性死神

協会のアジトというかむしろ巣となつてうろつろどころか邸内を我が物顔でのさばっている現状では説得力があまり無い。

実際は義妹の心労を減らす為と義妹の身を守るためという既に瀕霊廷中に知れ渡っているシスコン魂によって、ありとあらゆる方法で他隊の監視をとりやめたのが真相である。他隊への根回しに始まり、技術開発局への金銭的支援という名の賄賂。隠密機動総司令官へは、昔撮られた夜一のレア写真の贈呈。更に現在の山元総隊長が臥せっていることにより混乱している指揮系統を利用してのごり押し。と・ありとあらゆるコネと権力を使ったこの朽木隊長の行動のせいでここに来るまでの途中他の隊長格に冷めたを通りこしてごく生温かい視線を送られてしまった。

「で・お前はまたなにに悩んでんだ？」

縁側で使用人の持つてきた茶をすすりながら恋次はルキアに聞く。それに対して眉をよせたルキアは「何も悩んでおらぬ。」とそっぽを向く。

「嘘つけ。」じゃあさっきの盛大な溜息は何なんだよ・と言いたい。そもそも自分が今日ここに来たのも朽木隊長が「監視を追い払ったのに、ルキアの顔が晴れない。恋次貴様どうにかして理由を聞き出してこい。」と自分に命じたからだ。

そこまでわかつてるなら自分で聞き出せよ。とも思うが、自分もルキアのこと気がなつてたから、休憩もかねて監視の仕事を引き受けた。そしてたら盛大な溜息を吐くルキアに直面したということだ。「悩みというか、正直色々ありすぎて混乱してるという方が正しいかな。」

さっきまで眉をよせながら何かを考えていた風のルキアはポツリと呟く。

「うん？話してみろよ。人に話している内に整理がつくってこともあるぜ。」

まあそりゃそうだな。と思いながら恋次は茶菓子の団子をつかみ

ながら言う。

意を決したようにルキアは「まず1つ目に・・・崩玉についてだ。」と話します。

「崩玉が私の霊力を使って作られたということは理解した。実際、井上の双天帰盾で私にその霊力が戻ったのだし、それは確かだろう。・・・だがそれでは不自然なことがある。崩玉はいつ作られ、いつ私に封印されたのだ？」

「どうゆうことだ。」

「つまり何というか浦原達が瀟霊廷というかソウルソサエティを追われたのは101年前だろう。そしてその時には崩玉は完成していた。」

「ああ、確かに報告書ではそう出てたな。だが何か不思議か？ 戌吊で俺達に会うまで、それこそ赤ん坊のころにでもお前が浦原さんに会ってたんじゃねえの。」そういつて恋次はパクリと茶菓子の団子を食べる。

「うむ。確かに作られた時期はたいして問題は無い。私にお前と会う以前で浦原に会ったような記憶は一切無いがそれも赤ん坊のころに作られその後捨てられたのだとしたら矛盾は無くなるしな。」だが・とルキアは続ける「問題は封印された時期だ。101年前に奴は現世に追いやられその後はずっとそのままだ。そして私は少なくとも101年前にはソウルソサエティにいた。・・・つまり封印する機会などあるわけないのだ。そんな記憶もないしな。」

そういつてルキアはお茶をグイッと飲む。

1つ目からハードな悩みだな。と恋次は思いながら一番ありそうな事実を思い出す。

「ルキア。それはあれじゃねえの、一護に初めて会った時浦原さんが現れていろいろ世話してくれたんだろ。その時どさくさに紛れて封印したんじゃないの。」

「私も最初はそう思った。だがな藍染が言ってたのだが、そのそもその一護との出会いも私が崩玉を持っていたから起こった自分の

計画だと。・・・つまり一護に会う以前に私に崩玉は封印されていたということだ。」

それを聞いて恋次は答えに詰まる。「だけど藍染だぜ。あの人真顔で嘘つくだろ。」と一番忘れてはいけない事実を思い出しフオロする。だが確かに不自然な点が多いのも確かだ。

「まあそう言われればそうなのだが・・・。」そういつてルキアは団子に手を伸ばす。

「ま・結局のところは浦原さんに聞くしかないか。」

「そうなのだが・・・自宅謹慎が命じられているし、それに特に現世へいくことは禁止されているからな。」一護たちのことも気になるのだが、とルキアは呟く。

まあな。と恋次も苦い顔をする。確かに決戦直後の一護の様子はおかしかつたし、井上達の様子も気になるのだろう。

「まあもう少し情勢が落ち着いたら、現世にも行けるさ。でルキア1つ目ってことはまだあんのか？」できれば次はもっとソフトな問題にしてほしい。

「うむ。実は次の問題については解消してくれそうな人物に心当たりはあるのだ。だから恋次外出許可をくれ。」

「はあお前自宅謹慎の意味わかってんのかよ。」恋次は思わず聞き返す。

「わかっておる。耳元で騒ぐな。だから許可をくれといっておるのだ。」別にいくのは瀝霊廷内だし、監視を止めるとは言っていない。と続ける。

しばらくうーんとうなっていた恋次だが、これを断つてルキアが余計に沈んでしまったりすればそれこそ某スコン兄貴によって殺される可能性がある。

それになにかあっても自分がなんとかすればいいかと思ひ。

「よし、わかった。ただし俺も付いていくからな。どこに行くんだ

「？」

「本当か、ありがとう恋次！行くのはな．．．鍛冶屋だ。」
そういつて笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4850m/>

THE WRITER OF THE WORLD

2010年10月8日10時58分発行